

さろん仙台ツアー2017

——「哲学ツーリズム」の視点から——

芹沢幸雄（さろん）

——宛先も差出人もわからない叫びをひとつ預かっている（奥田亡羊）

0. はじめに

さろんでは「さろん仙台ツアー」（2017年6月17日 - 18日）を実施した。2012年の「さろん京都ツアー」以来じつに5年振りのツアーとなった。“tour”という語には『(視察・巡遊などの) (小) 旅行、周遊、観光旅行、(劇団の) 巡業、(スポーツチームの) 遠征』という意味があり、ラテン語の原義では『旋盤、回るもの』だという。

今回のツアーはまさしくこれ

らの意味を包含したような旅となった。ある時は遠征や巡業の主催側スタッフ（「さろん哲学」）であり、またある時はイベント主催者としての視察・周遊（「考えるテーブル てつがくカフェ」¹）であり、あるいはただの一個人としての観光（自由時間）であった。

こうしたツアーの実施にあたっては参加者の主体性を引き出せるような「旅マエ、旅ナカ、旅アト」をそれぞれどうデザインしたらいいかということが肝になるが、本稿ではこのツアーを来るべき“哲学ツーリズム”の先触れとしての視点から振り返ること

¹ 考えるテーブル てつがくカフェ
<https://www.facebook.com/CafePhiloDeSendai/>

実践の扉

とする。なお“哲学ツーリズム”²とはカフェフィロ代表の山本和則氏が、『ツーリズムと哲学対話を組み合わせた』『探究的なツーリズム』として提示しているものであり、本稿でもこの前提に則って稿を進める。



1. 旅に出る、ということ ～哲学ツーリズム序説～

“哲学ツーリズム”を構想する際に次の指摘が非常に重要な視座を与えてくれる。京都市立芸術大学芸術資源研究センターの佐

藤知久氏が提唱する「フィールド哲学」によれば、『(フィールド哲学とは)自分自身をとらえて離さず、そして哲学的と呼びうるような長い射程をもった問題について、孤独な概念的思索のみによってではなく、いま自分自身が他者たちとともに生きている日々の経験のあり方を綿密に分析していくことを通じて、思考すること』だという。そのために重要な点として、『①あなたが問いたいその問いについて考えるのに最も適すると思われる場所を探し、そこに行くこと。②その場で活動している人たちの間に身体を置き、その場で起きていることにあなたの思考を徹底的に沿わせながら、自分自身が真の意味で納得できるまで思考すること』という2つを挙げている³。一人ひとりの内に眠る、フィールドに出かけたくなる瞬間の根源的能動性を重

² 山本和則「旅と哲学対話～哲学ツーリズムの可能性について考える」(於第3回哲学プラクティス連絡会、2017. 10. 22)

³ 佐藤知久「フィールド哲学とは何か——思考するために適した場所で考えること」(『世界の手触り』ナカニシヤ出版、2015)

視し、それを哲学的な場所、哲学的な関係性のなかに解き放つ。それこそ、佐藤氏が提示する『思考するために適した場所で考えること』である。

ではこうした視座を手掛かりとして「さろん仙台ツアー」を振りかえってみよう。

*

旅に出はじめて考えることがある。旅に出るまでは見えなかったものがある。旅に出るとは、“いま・ここ”が移動することだ。

日々のなかでイメージしている「仙台」や「東北」、あるいは「震災」といった事柄も、“いま・ここ”である関東での生活のなかから立ち上がってきた認識にほかならない。

かといって、“いま・ここ”が移動するということがそのまま真実を理解するということにはならない。従って旅に出るということは、「私は本物を知っている」などという慢心から遠く離れ、「知っている」という認識を「ま

だなにも知らない」「十分には理解できていない」へと正しく変容させる行為である。文学研究者で批評家のエドワード・W・サイードはその著書において、『故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかんがりの力をたくわえた者である。だが、全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である。』⁴という一節を引用することで暗示する。

あるいは旅に出かけるとは、既知のものとして知覚されている対象に対して〈異郷〉として出会い直すことでもある。鷺田清一氏は『デペイズマン (*dépaysement*)。居心地の悪いこと、異郷にあること、立ち位置をずらされること。見晴らしのよい場所に出るためには、さしあたってここが確かな場所でなくなることが前提にな

⁴ エドワード・W・サイード『オリエンタリズム(下)』(平凡社ライブラリー、1993) (p138; アウエルバッハが引用した聖ヴィクトルのフーゴー著『ディダスカリコン』の一節)

実践の扉

ります。』⁵という言い方で、〈異郷〉に踏み出すことの重要性を問いかけている。

さろんでは、仙台ツアーの出発前に『想像ラジオ』（いとうせいこう）、『ボラード病』（吉村萬壺）、『還れぬ家』（佐伯一麦）という震災後文学3作品を横断して読みながら、〈震災と〈わたし〉のあいだ〉というテーマを3ヵ月かけて掘り下げながら問いかけた。現実起こった出来事を虚構化・再構成した「小説」という皮膜を通して震災の経験を読み直す試みでもあったが、この試みを通して一度まとめられ固められようとしている思考さえも脱ぎ捨てることで、ようやく〈異郷〉へと踏み出すことができると考えたためでもある。

ではこの〈異郷〉でなにを見て来たか。

今回の仙台ツアー告知では明

⁵ 鷺田清一「わからないことにわからないまま正確に……」（『ミルフィユ 06 わからないことにかかわれなくなってきた。』smt、赤々舎、2014）

記こそされていないが、7年前に起きた東日本大震災がひとつの核としてある。〈異郷〉としての仙台に出かけてみて、抜き差しならない〈震災〉という事実にあらためて接することになった。自分自身もまた、ツアーに参加したことで、“いま・ここ”が〈震災〉に触れ直す、という体験ができたと感じた。



2. 〈震災体験〉に触れ直す

訪問した「てつがくカフェ@せんだい」の活動は震災前の2010年から行われていたが、震災後その様子が大きく変わったという。

実践の扉

特に仙台市の複合文化施設「せんだいメディアテーク」で実施されている「考えるテーブル てつがくカフェ」は〈被災地〉や〈被災者〉、〈被災体験〉という問いをめぐって、震災発生から100日目の2011年6月に活動を再開し、根気強く対話の場を積み重ねてこられた。

自分が体験したことを言い表すのにどんな言葉が適当なのか、それをどこから話し始めたらいいいのか——。対話やテーマの具体的な見通しなど持てないまま、圧倒的な切実さに圧されてその場は開かれ始めたと思像されるが、最盛時には100人を超す参加者がこの場での対話を求めて訪れたという。

こうした情報をHP等を通じて得ることができた一方で、被災地と呼ばれる場所とそうでない場所の分断を超えて対話を行う「てつがくカフェ@せんだい×とうきょう」⁶という試みも2014年か

ら東京で開催されてきた。

ここでは、「震災を生きる私たちにとっての〈東京〉とは」、「震災を語るときのズレを問う」、「震災を語る資格」や、それ以外にもさまざまなテーマが対話されていた。対話のなかでは〈被災の当事者とはいったい誰を指すのか?〉や〈ほんとうの支援ってなんだろうか?〉、また〈被災者の痛みを理解なんてできるのか?〉という真剣な問いが浮かび上がった。〈考えたいと思っているのか、考えなきゃいけないと思いついでいるのか、自分の気持ちがわからない〉という率直で困り顔の感想が聞かれたりもしたのが記憶に残っている。

仙台ツアーで訪問した「てつがくカフェ」。この回のテーマは「いま、『選ぶこと』の意味を問い直す」だった。『選ぶこと』という一般化された言い回しがされているものの、テーマ設定の背景に

⁶ てつがくカフェ@せんだい×とうき

ょう
<https://sendaixtokyo.jimdo.com/>

実践の扉

あったのは、某大臣の「自主避難した人たちは…」という発言への違和感だったという。それゆえにこのテーマは『自主避難を「選ぶこと」は、たとえそれが本人の〈選択〉（自己判断）に基づいたものという体裁をとっていたとしても、その〈選択〉の結果を単純に「本人の責任」だと言い切ることは難しいのではないのでしょうか。』⁷という、震災そのものに触れた問いにもなっている。

この文脈と「震災について対話を重ねているてつがくカフェ」という性格もあいまって、哲学対話のなかで“選ぶ”ということについて話されるとき、「自主避難者のケース」に寄せるまなざしや「震災の具体的な事実（体験）を捨象しない」という心情がここでは常に寄り添っていると感じられて印象的だった。なにを語るにも頭のなかに震災のことがよぎる人と、必ずしもそうではない人

の言葉が交差することで露になるその“溝”を感じ取ることは、〈震災〉に触れ直すことの端緒なのではないか。差異が色濃く際立つ対話の場——という〈異郷〉に身を置くことでそれまでの認識がゆらぎ、それによってはじめて得られる視点がある。持続する緊張感のなか2時間半に亘ってじりじりと、そして真剣に問いと向き合い続けた参加者一人ひとりの姿勢や身振りなどからもたくさんの気づきを得られたようにおもう。



3. 「観光客」として考える、ということ

⁷ てつがくカフェ第61回「いま、『選ぶこと』の意味を問い直す」
<http://table.smt.jp/?p=13618>

実践の扉

自由時間を利用して仙台でも津波被害の大きかった沿岸部、若林区の荒浜を訪れた。仙台駅から地下鉄東西線に乗って13分の荒井駅、そこから市営バスで15分ほど。仙台市街から30分も走らない荒浜地域には震災前1,700人が暮らし、津波で集落ごと流されたとドキュメンタリー番組⁸で目にした。

南東からの「イナサ」と呼ばれる温かな風が吹くなか、今年4月に震災遺構として開設された「仙台市立荒浜小学校」⁹を見学した。

⁸ 「イナサがまた吹く～風 寄せる集落に生きる～」2012.6.2

http://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20120602_2

「そしてイナサは吹き続ける～大災害を生きた集落11年の記録～」2016.5.21

<http://www.nhk.or.jp/docudocu/program/20/2259537/>

「それでもイナサは吹き続ける～ふるさとを紡ぎ直す人々～」2017.6.11

<https://hh.pid.nhk.or.jp/pidh07/ProgramIntro/Show.do?pkey=001-20170611-21-26283>

⁹ 震災遺構 仙台市立荒浜小学校

https://www.city.sendai.jp/kankyo/shisetsu/ruin_arahama_elementaryschool.html

沿岸から荒浜小に達した波の痕跡が外壁にはっきりと残り、津波によって壊された壁やベランダの手すりなどが当時のまま保存されているのは震災遺構なればこそである。それだけに、震災当時の災禍を白日の下に晒し続けるモニュメントに複雑な思いを抱く人の数も少なくないだろう。

「震災遺構」と検索すると関連ワードに「賛否」や「問題」が挙がってくることから想像がつくように、震災遺構として保存するのか撤去するのかをめぐって被災地（者）のあいだで意見が二分されたり分断が生じていたりする。その様子はTV番組でも見聞きしていた。訪問した荒浜小学校も震災遺構として開設するまでに6年という歳月を要しており、似たような状況があったことは想像に難くない。

荒浜地区への最寄り駅である地下鉄荒井駅に震災後併設された「せんだい311メモリアル交流館」も、震災の記録/記憶をど

実践の扉

う扱うのが相応しいのかという同根の問いに直面し、その新設意義が議論されたのだろうと連想される。訪問時に開催されていた企画展「それから、声がきこえる」には個人的に強い感銘を覚えた。『東日本大震災の発生から現在まで、私たちにはそれぞれの歩みがあります。(略)あの日から現在までを振り返るワークショップを実施し、「それからの声」を集めました。個人があの日からの災禍とそれに続く一連の出来事に、どう折り合いをつけて過ごしてきたかを感じていただくために、鑑賞者と一対一の関係を結ぶ声を手段にするのが有効ではないか、と考えました。これは、等身大の経験をそのまま体感していただくドキュメンタリーです。』¹⁰という趣旨のこの催しは、交流館の存在意義を決して大声ではなく、静かに、そして確実に示していると感じられる展示内容と構成だった。

¹⁰ せんだい311メモリアル交流館
<http://sendai311-memorial.jp/exhibitions/feature/>

観光客として荒浜小や交流館を訪れたことで、荒浜地域の被害の様子や津波の脅威、屋上から眺めた海岸線との距離、また鑑賞という形式での被災者との対話など、現地にいかなければ得られなかったであろう知覚に触れたようにおもう。それは観光でなければ味わえないことであり、観光客としてはそのような場所が設けられていることへの有難さも痛感する。しかし、同じくらい重要だと個人的に考えるのが、震災遺構や震災記録施設などが出来あがるまでの「決して一筋縄ではない“経緯”へと視線を向けることができる取り組み」の存在である。そこで実際に行われたであろう“対話”を想像する手がかりといってもいい。

たとえば震災遺構の開設に関連して「『震災遺構』って何？」というテーマでつがくカフェが開かれ、その対話の記録が残され公開されている。この回のつがくカフェでは、『震災で43人の

実践の扉

尊い命を喪った宮城県南三陸町の防災対策庁舎のように、保存が決定するまでに 20 年余りを要した広島原爆ドームにならい、保存の是非に関する最終的な判断を次の世代に託した例もあるほどです。／とはいえ、「遺構」を残すべきか残さざるべきか、あるいはそうすることがよいのか悪いのかなどといったそれぞれの立場の〈隔たり〉や〈対立〉を際立たせるような問いのたて方からだけは、この困難さを解きほぐすには相当無理があるように思われます。なぜなら、そこには、そもそも市民にとって「震災遺構」とは何なのか、あるいは「遺構」として「価値のあるもの」、「相応しいもの」とははたしてどのようなものなのか、さらには、被災地が残すべきものとはそもそも何なのかなどといった、本来「震災遺構」が備えている（べき）特性や意味そのものについて吟味する丁寧さが抜け落ちているよ

うに思われるからです。』¹¹という問いについての話し合いが行われたという。この対話の中で「一人一人にとっての遺すべき遺構の基準」についても話し合われたと記録されている。

対話の積み重ねがこうしてきちんと公開されることで、震災遺構・荒浜小の存在と表裏一体となり、テーマを単発の対話で終わらせず、現在に至るまで問いかけられ続けていると感じられた。正解がすぐ出ない問い、未来に向かって常に検証され続ける問いである。だからこそ、この問いを再検証するために必要な対話の記録が保管されていることの重みも感じるようになった。

また、せんだいメディアテークでは『市民、専門家、スタッフが協働し、東日本大震災とその復旧・復興のプロセスを独自に発信、記録していくプラットフォームとして「3 がつ 11 にちをわすれな

¹¹ てつがくカフェ第 57 回『震災遺構』って何?」2017 年 2 月 18 日
<http://table.smt.jp/?p=13430>

実践の扉

いためにセンター」(わすれン!)』¹²が開設され、震災をめぐる写真や映像だけでなく、「タイトル・ルート・トタン ー荒浜・藤塚と浪江の記録ー」¹³といったアート関連の取り組みや震災をめぐるさまざまなテキストや音声までもがアーカイブされている。

震災遺構である荒浜小を訪問すると同時に、このような対話の記録に触れることによって、単に

〈この場所でなにが起きたか〉

〈今後の津波対策としてどんなことを実施したか〉という点に留まらず、〈被災地ではどのような問いが起こり、その問いからどんな対話や実践が生まれてきたのか〉という深奥部にまで入っていくことができる。このような〈異郷〉でこそ、観光客は〈震災〉経

験に触れ直すことができるのかもしれない、とひと際強く感じられた。



4. 〈震災〉と観光客

今回の旅に出発する途中、福島を通過して仙台へと至る新幹線やまびこに乗って北上しながら、車窓の景色やアナウンスに流れる地名を、被災地という先入観で見ている自分に戸惑いを覚えた。じっさい〈震災〉についてのでつがくカフェに参加したり震災遺構を訪れたりしたのは事実で、今回のツアーの背後に〈震災〉の存在を強く感じているからなのだが、だからこそ表層的な感想ではな

¹² 3がつ11にちをわすれないためにセンター(わすれン!)

<http://recorder311.smt.jp/>

¹³ タイル・ルート・トタン〜荒浜・藤塚と浪江の記録

<http://recorder311.smt.jp/information/55651/>

い「自分にとってなるべく本質的な見解」を持つことが倫理的で正しいふるまいなのではないか、と感じている自分自身もいて、自主規制にも似たその縛りを持って余すような気分が常に付き纏っていた。ここには、福島や宮城を被災地としてのみ切り取って表象しているような居心地のわるさや、今回のツアーがいわゆる「ダークツーリズム」¹⁴の域に留まってしまい、哲学ツーリズムにならないかもしれないという不安があったと思う。

しかし、余所からやってきた観光客という覚束なさがあったからこそ、さまざまに学ぶことがあったのもまた事実だろう。批評家の東浩紀氏が『観光客の哲学』¹⁵で指摘したような抽象的・概念的な「観光客」と、生身の個人としての「観光客」では条件が当然違っ

てくるが、今回のツアー体験を通じて、強く印象に残るものはいくつかあった。

『ぼくの考えでは生きることそのものが「観光」なんです。ぼくたちはこの現実に観光客のようにやってくる。たまたまある時代ある場所に生まれ落ち、ツアー客がツアーバスで見知らぬ他人と同席するように、見知らぬ同時代人と一緒に生きていく。ツアーは1年で終わることもあれば80年続くこともあるけど、いつかは終わり、元の世界に戻っていく。そしてそんな観光地＝この現実に対して、ぼくたちはほとんど何もできない、何も変えられないし、ほとんどのことは理解できない。でもちょっとだけ関わることができる。人生ってそんなもんだと思いますね。』¹⁶という東氏の発言はツアーの実施後により重く受

¹⁴ 井出明「日本におけるダークツーリズム研究の可能性」(『進化経済学会論集』No. 16, 進化経済学会)

¹⁵ 東浩紀『ゲンロン0 観光客の哲学』(ゲンロン、2017)

¹⁶ 東浩紀インタビュー(聞き手・坂上秋成)「哲学的態度=観光客の態度」(週刊読書人2017年5月4日)
<http://dokushojin.com/article.html?i=1253>

実践の扉

け止めるようになった。

また、同書を読んだ批評家・佐々木敦氏による『「観光客」であるだけではやはりまだ足りない。なぜならそれではすでに失敗した「ネット的主体」的な様態に後退することが出来てしまうから。一方方向ではなく双方向的な関係性。だが同時に互いを無理に拘束するようなものではない関係性。「観光客」であり且つ「家族」でもあるということ。／あくまでも「観光客」として、どこかの誰かと「家族的類似性」を結ぶこと、あるいはそれを発見すること。』¹⁷という指摘も、仙台ツアーの最中、さろん哲学の参加者との交流や親睦会を通じて体感された。「てつがくカフェ@せんだい」のスタッフ各位との面談交流の時間は、離れた場所でもともに哲学プラクティスを実践しているという類似性の点でも非常に新鮮な体験となったと感謝している。

¹⁷ 佐々木敦

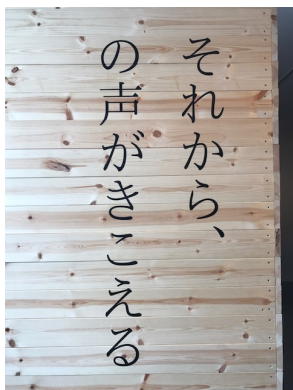
<https://togetter.com/li/1098864>

今回のようなツアーを行うことで、ツアー一行の面々の中でそれぞれ活発な省察が行われたのはもちろん、異なる場所で哲学プラクティスの実践をしている団体・個人とのあいだで交流を結ぶことができたのもしみじみと実感できた。

“交流”と一言で済ませるとそっけなく感じるが、敬意や共感を寄せずにいられない相手と直に言葉を交わすことで、その存在自体に励まされるような感覚を持った。この「観光客」という考え方については、朝日新聞編集委員の塩倉裕氏による次のような解説もあり、哲学ツーリズムを検証する際にも興味深い指摘となると思われる。『予期せぬコミュニケーションをベースに、人間の持つ「憐れみ」という感情を足がかりにしながら立ち上がる国際的な連帯の担い手。東さんはそれを今回、「郵便的マルチチュード」とも呼んだ。郵便的とは、「誤配」される可能性を多く含んだ状態、

実践の扉

偶然性に開かれた状態をさす用語だ。／「誤配こそが社会をつくり連帯をつくる。だからぼくたちは積極的に誤配に身を曝さねばならない』¹⁸。



5. つぎの哲学ツーリズムに向けて

さろん仙台ツアーで実際に体験したことについて、「フィールド哲学」や「観光客」という視点

から振り返ってみた。震災遺構をはじめとする現場を見学し、記録を通じてそこで問われてきたものに触れ、それをふまえてつがくカフェに参加し、現時点における自分自身の考えを言語化する。そのことでようやく獲得できる“一歩”というものがあるのではないだろうか。震災（体験）を哲学的に振り返るためには、それ相応の準備や手続きが重要になってくる。この手続きの一つが「思考するために適した場所で考える」ことであり、ここに「哲学ツーリズム」が拠って立つべき軸がある。これ以上の点については、さらに時間をかけて吟味する必要がある。今回のようなツアーを継続的に実践しながらその取組みの中でさらに検証を続けていきたい。

最後に、旅アトにあった印象的な出来事をご紹介したい。さろんでは毎月メールニュースを発行しており、催事情報やスタッフによるコラムを掲載している。ツアー一終了後に迎えた2018年3月に

¹⁸ 「「観光客」人つなぐ新たな思想 東浩紀さんが哲学書」(朝日新聞、2017年6月21日)

<http://www.asahi.com/articles/ASK6M76N9K6MULZU012.html>

実践の扉

発行したメールニュースに、エッセイの寄稿が2本あった。うち1本が今回のさろん仙台ツアー参加者からのもので、この時期に合わせてツアーを振り返る内容のものだった。そして両エッセイが共に、3月というこの時期を意識して書かれたものであった。参加者から届けられた寄稿を拝見しながら、ツアーを実施することで確かに残るものがあったということが再発見できた。届けられたこのエッセイを読みながら、自然とまた、自分自身もこの仙台ツアーを振り返る契機となるのであった。旅アトへのこうした波及効果も、「哲学ツーリズム」の妙ではないだろうか。

*

末尾になったが、本ツアーの実施に際し、てつがくカフェ@せんだいの西村高宏氏、近田真美子氏、齋藤さかえ氏には大変お世話になった。心から感謝申し上げたい。

本稿で概観したように、哲学カフェとツーリズムを組み合わせ

た“哲学ツーリズム”にはさまざまな可能性があると考え。今後は“哲学ツーリズム”としての諸条件をさらに探究しながら、新しいコラボレーターとも協働して、5年振りといわず次回はもう少し早く実施できたらと考えている。すべての参加者にご協力いただいた方々に改めて心より御礼申し上げます。

また本報告をご覧いただき、ツアーにご関心をお持ちの方々と繋がれたら幸いである。

※文中写真は全て筆者撮影
(撮影許可を確認済)

以上

